

北九州モデル導入の**実際**を聞きました

先人たちの声

医療法人北愛会 介護老人保健施設

桜丘

入所49名/短期入所1名
北九州市小倉北区上富野3-17-1

平成14年7月に開設。母体は100年の歴史を持ち、北九州の地域に根差した医療・看護・介護のサービスを提供している。



北九州モデル導入の主な取組内容

- 北九州市介護ロボット等導入支援・普及促進センター（以下、センター）実施の業務量調査とその報告を受け、主に**居室巡回と記録業務の効率化**を課題として掲げ、センターの助言を受けながら具体的な取組内容を計画。
- 居室巡回の効率化では、見守りカメラ導入に向けて**福岡県介護ロボット導入支援事業費補助金**を申請。見守りカメラ導入により、**不必要な訪室が削減され、タイムリーな対応**が行えるようになった。
- 記録業務においては、**申し送り書類の運用を見直したことにより、二重記録が削減され、業務負担が軽減**した。

看護師長
坂本友紀さん



介護士長
成松典子さん



北九州モデル導入の流れ (センターによる伴走支援)

		R4								R5		
		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
準備	キックオフミーティングと今後の流れの共有	■										
調査	センターによる業務量調査と結果報告会		■	■	■	■	■					
検討	課題抽出と解決策立案に向けた意見交換						■	■				
実践	センターとの実施状況の共有や意見交換/振り返り							■	■	■	■	

1 北九州モデルに取り組もうと思ったきっかけは？

人手不足が続いており、このままではますます現場の負担が増えてしまう状況でした。そして、この局面を乗り切るために何か業務改善を進めなければと考えていました。そんな折、北九州モデル導入の話があり、**業務改善を具体的に進め、業務の省力化と離職防止を図る良いきっかけになるのではないか**と思い、取り組むことにしました。

5 取組にあたり壁になったことは？

感染症の流行が最も大きな壁になりました。日々の業務に加え、感染症予防やその対応に追われ、なかなか思うように業務改善の取組を進めることができない時期がありました。しかし、**必ず良い結果を生むのだという想いをもち続けた**ことで、取組を継続させていくことができました。

2 職員との合意形成はどのように行いましたか？

まずは**労働環境の改善を図る委員会**で北九州モデルの説明と**取り組む目的を明示**しました。また、**職員を対象に業務改善に関するアンケート**を行い、**現場の意見も出してもらう**ことで、取組への合意形成を図っていきました。さらに、**取組の結果や効果を都度現場へ示し、取組のメリットも理解してもらう**ことで、より一層合意形成を得ることが出来ました。

6 今回の取組で役に立ったことは？

業務量調査によって**業務をデータとして「見える化」**できたことで、これまで「何となくこうだからこうしよう」と進めてきた**業務の効果測定ができ、客観的に自らを振り返るきっかけ**になりました。また、変化に対して消極的だった職員も効果を実感できたことで、前向きにチャレンジをするようになるなど、**職員の意識改革**にもつながりました。

3 多職種をどう巻き込みましたか？

労働環境の改善を図る委員会は、**多職種で構成**されており、そこで、話し合いを進めていきました。加えて、利用者の属性によってフロア機能が大きく異なっていたため、**一つのフロアに絞って取組を進めていった**ことで、これらに関わる医師、看護師、介護福祉士、介護職員、リハビリテーション専門職などを巻き込むことができました。

7 新たな取組など、今後の方針は？

新たな取組として、AIを用いた歩行分析や口腔機能評価が可能なアプリを用いて、専門職以外の職員でも利用者の状態を客観的に捉え、**科学的根拠に基づいたケアの実現を図っていく予定**です。また、これまでの取組を整理し、まとめ、外部へと発信することで、**施設の付加価値を高めつつ職員の更なるスキルアップを行っていく予定**です。

4 不平不満が出たとき、どのように対応しましたか？

調査や書類作成等、**現場の負担を増やす取組**に関しては、**役職者を中心に進めた**ことで、現場職員からの不平不満は一切ありませんでした。ただし、役職者へは負担がかかることがありましたので、**随時施設長代理など上位の管理職から声をかけ、意見を傾聴し、心理的フォロー**を行っていきました。

8 これから取り組む施設へのアドバイスを！

新しいことにチャレンジする際には、何かしらの負荷がかかるかと思いますが、チャレンジを続けることで**必ず効果が生まれ、利用者にとっても職員にとってもポジティブな変化を生み出す**ことができます。ぜひ、**諦めずにチャレンジをし続けてほしい**と思います。そして、新たな介護の担い手となる若い人にも興味を持ってもらうよう一緒に頑張りましょう。